

CONTENTS

地域会だより 1

連載【隔月 全6回】大阪建築家ものがたり
第4回 - 三井住友銀行大阪本店ビル - 2
倉方 俊輔

JIA建築家大会2022in沖縄の参加報告と
JIA建築家大会2023東海@常滑に向けて 4
小田 義彦・浅井 裕雄

愛知発 ~愛知県政150周年連携イベント~
WOODコレクション2022 in あいち 6
澤村 喜久夫・森 哲哉・金山 美登利・高木 耕一

岐阜発 JIAの窓〜ぎふ「20×20」コミュニケーション〜
20枚のスライド×20秒のプレゼンで自分を表現 8
山田 浩史・濱野 華楓

三重発 ~2022 Study Session2~ 山上 健氏 講演会
デジタルのリアル 9
相原 宏康

保存情報 第251回
登録有形文化財：湊築島弁天社 10
鈴木 利明

編集後記 10
川合 克己・恒川 和久

2022JIA住宅建築賞 2次審査 11
伊藤 恭行・脇坂 圭一

地域会だより 今後の予定

- JIA東海支部
・12/9 第6回 支部役員会 (WEB同時開催)
- JIA静岡地域会
・12/8 静岡地域会拡大役員会の開催 (WEB同時開催)
JIA塾「静岡地域型 カーボンニュートラルを考える」
- JIA愛知地域会
・12/12 一寸格子ワークショップ 猪高小学校建築教室
・12/23 第7回役員会 (WEB併用)
- JIA岐阜地域会
・12/15 第8回役員会 18:30~20:30
- JIA三重地域会
・12/9 第6回役員会 第5回例会 会員研修会③ 講師: 向口武志氏
・12/10 三重建築学生合同課題発表会2022 ゲスト: 大室佑介氏
・12/14 出前授業 (三重短大: 住宅課題エスキス)

Bulletin Board

2023年JIA建築家大会は常滑で開催します。



●2年ぶりの全国大会は沖縄。リアルの素晴らしさ、中でも全国の友人と会うことができ、全国組織の良い面を満喫。更に沖縄支部の皆さんのホスピタリティあふれる大会でした。

●いよいよ、来年は東海支部がホスト役です。新しい大会のあり方を模索しつつ、良いものを継承出来る大会を目指したいと思っています。みなさんとワクワクしながらつくりあげたい。

大会委員長 / 小田 義彦
大会実行委員長 / 浅井 裕雄
実行委員 / 柳澤 力・関口 啓介
近藤 万記子・黒野 有一郎・西村 和哉
笹野 直之・高木 耕一・宮坂 英司
川本直義・恒川和久

表紙 街で見かけた風景 ⑨ 「スーパーカーを乗りこなす」

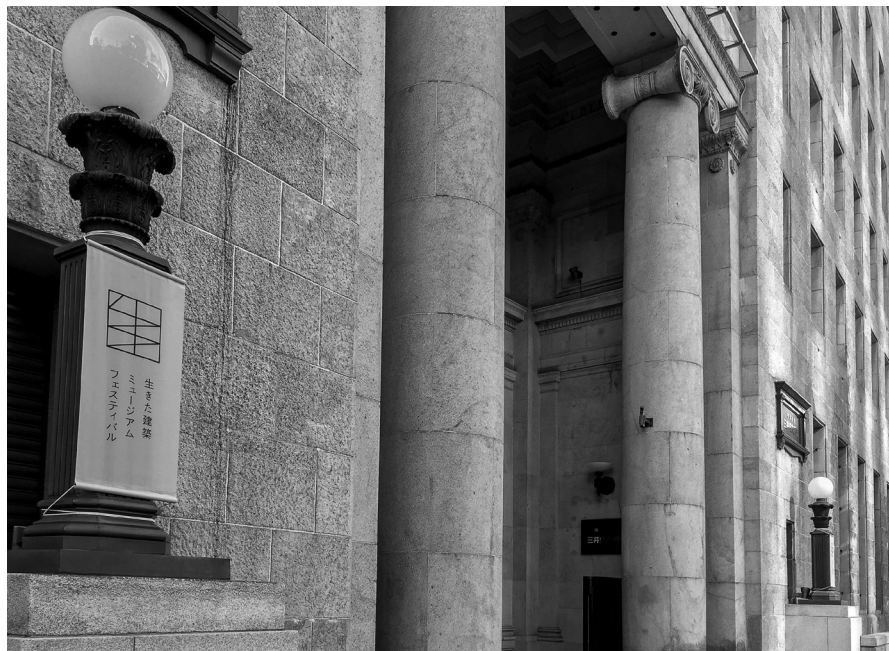
SDGsの12番目に「つくる責任、つかう責任」とある。トイレの位置が分かりにくいとクレームがあったとしても、いつも使う人にとっては特に問題にならないし、「トイレが分かりにくい方が良い」と思う恥ずかしがり屋さんもいる。楽しく使う能力が必要とされている。あなたならこのスーパーカーをどう乗りこなしますか？

「豊田市逢妻交流館」2010年 設計: 妹島和世



吉元 学 (JIA愛知)
ワークキューブ / 愛知淑徳大学

第4回 三井住友銀行大阪本店ビル



イケフェス大阪

毎年秋に行われる「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」(通称「イケフェス大阪」)が、3年ぶりに本格的な開催を迎えることができた。

イケフェス大阪は、2014年から毎年実施されている建築公開イベントである。2020年、2021年は、コロナ禍の行動制限の影響で、オンラインを中心に行われた。それが今年は、10月29日(土)、30日(日)のメイン期間を中心に、当初からの姿を取り戻して、普段は公開されていない建物が公開されたり、立ち入れない場所に入れたり、特別な催しが行われたりと、リアルな建築を通じて人々が出会うことのできるイベントとなった。

現在のイケフェス大阪の主催者は、建物所有者をはじめとする民間企業、専門家、大阪市等が協力・連携し、2016年に発足した「生きた建築ミュージアム大阪実行委員会」だ。実行委員会は「イケフェス大阪」を主催するほか、建物所有者や関係者の方々のご協力を頂きながら、「生きた建築」を通じた新しい大阪の都

市魅力の創造・発信をめざして、様々な活動を展開している。「ARCHITECT」2022年10月号の前回の連載「大阪市中央公会堂」の最後で触れた子ども向けの建築の本『はじめての建築01大阪市中央公会堂』の出版も、この委員会の活動の一環となる。2017年には「大阪市『生きた建築ミュージアム事業』による建築文化の振興」として、橋爪紳也、嘉名光市、倉方俊輔、高岡伸一、大阪市都市整備局の連名で日本建築学会賞(業績)を受賞した。

取り組みの始まりは、大阪市が2013年度に、まちをひとつの大きなミュージアムと捉え、そこに存在する「生きた建築」を通して大阪の新しい魅力を創造・発信する取組みを「生きた建築ミュージアム事業」として始めたことだった。その一環として、2013年度に行われた社会実験を経て、2014年度に「イケフェス大阪」がスタートした。実施期間は現在と同じ週末の2日間で、2014年度は55の建物で77プログラムが実施され、延べ約1万人が参加した。2015年度は95の建物で

120プログラムが実施され、参加者数は延べ約3万人になって、大阪発の日本最大級の建築公開イベントに成長した。建築関係者以外にも多くの方々が、週末に建築を見に来られたことが、この数字に現れている。

このように建築を通じて多くの人々に大阪の新しい魅力に触れていただく貴重な機会が生まれたことを継続にすべく、官民学が一体となった実行委員会が発足し、2016年以降も開催が可能になった。公開参加建物数や参加者数も増え続け、2019年には公開参加建物数が169、参加者数が延べ約5万人を数えた。今年は3年ぶりにもかかわらず、新規のものも含めて、公開参加建物数は138にもなった。このうち申込不要で楽しめる建物が、メイン期間の各日ともに100件近くもあり、好天に恵まれたこともあって、市内の各所でガイドブックを手にした方々を目にすることができた。

都市の建築

このように人々に親しまれる「生きた建築」とは何か。それを考える上で私たちは、始まりとなる2013~14年度に50の大阪市内の建築を選び、「大阪セレクション50」と名づけた。今回ご紹介する「三井住友銀行大阪本店ビル」もその一つだ。

住友ビルディングとして完成してから現在までの約90年間に、建物以外のさまざまなものは移り変わった。西に流れていた西横堀川は高度成長期に埋め立てられ、今は高速道路が走っている。周囲に超高層ビルも増えた。旧住友銀行と連携各社の本拠であった建物も、現在では、三井住友銀行大阪本店ビルとなった。

それでも、土佐堀川越しの景色は変わらない。大阪の発展を支えてきた川の流

れは太く、建物全体を観察する余地を与えている。そんな人々の視線に対して建築は時間を超えた美しさで、臆することなく応えているように見える。

「住友本店・銀行本店」の建設は、1895年に住友家が本格的な銀行業への進出を決定した時から構想されていた。これを担当する部署として設立された臨時建築部は、住友家の寄付によって1904年に開館した大阪府立中之島図書館の設計を担当した後、1908年、現敷地の南側に本格的な木造西洋建築である住友総本店仮建物を竣工させた。現在の建物は1922年に設計が完了。二期にわたる建設工事を経て、1930年に完成したものだ。

「住友ビルディング」の名と実を反映するかのよう、外観には「ビルディング」らしさと「銀行」らしさが噛み合さり、互いに引き立てあっている。

西洋風の列柱を使わず、窓のプロポーシオンによって品位を獲得する手法は、1925年に渡辺節郎の設計で完成した中之島の大阪ビルディング（現・ダイビル本館）と同じもの。表現を抑制し、見た目の機能を限定しない先進性、合理性が読み取れる。

土佐堀川に面した正面の「銀行」らしさは、中央に立つ2本のイオニア式の柱とその上の梁状のエンタブラチュアに集約されている。印象的な外壁は兵庫県高砂産の黄竜山石を砕石、これにイタリア産大理石トラバーチンを砕いて混合し、鉄筋を入れて成形した擬石ブロックで覆ったもの。そこに黄竜山石の本石による柱とエンタブラチュアに導かれて3階

部分まで達するエントランス空間が穿たれている。

壮大な営業フロアが位置するのは、その先である。吹き抜けの空間に大理石製のコリント式の柱31本が並び、植物をモチーフとした紋様が細部にまで駆使されている。圧倒的な説得力をもって、戦前の銀行本店が備えるべき質が何であったかを教えてくれる空間だ。

建物には明治からの様式の保守本流と、大正以降の合理性が高度に統合されている。住友の本店としての重みを理解し、長期的な判断を下す精神が、時代に流されない存在感として結実している。

もう一つ、変わらないのはその精神だろう。2015年に約2年間の改修工事を終え、ステンドグラスなども当初の輝きが蘇った。建築は今日も見られることの責任を受け止め、大阪にいるのだと人々に実感させるような公共性を提供し続けている。

反対の南面は一転して、中世風の穏やかな表情で、こちら側も見てまわりたい。江戸時代以来の狭い通りを気にかけて設計にも、都市と共にあるという性格が感じられる。

つくり手の系譜

今年のイケフェス大阪でも、三井住友銀行大阪本店ビルには、ステンドグラスがある応接ロビーや営業フロアを、2日間とも10時から17時まで特別に公開していただいた。

この建築公開イベントは、建築をそれ単体だけでなく、使われ方や周辺環境とともに捉え、自分の街を捉える機会となっ



ているのではないだろうか。公開の目印として正面に掲げられたイケフェス大阪のパナーを久しぶりに眺めながら、そう思った。

イケフェス大阪で公開されている対象には、建築のつくり手も含まれている。2022年は市内の9つの設計事務所や、竹中工務店や大林組といったゼネコンがオフィスなどの特別公開を行った。

その一つである日建設計は、住友の臨時建築部において三井住友銀行大阪本店ビルの内外観を手がけた長谷部鋭吉、そして竹腰健造という二人の建築家を中心に1933年に設立された長谷部竹腰建築事務所を祖とする。三井住友銀行大阪本店ビルの改修工事も日建設計が手掛けた。耐震補強工事に加え、現状を尊重して保存する箇所と、現代的な工法で更新する箇所を整理・共存させ、次の100年に備えている。

イケフェス大阪は、一般の方々が建築をつくり、都市をより良くしようとする専門家の意志や技術に触れられる機会にもなっている。今年から京都でも「京都モダン建築祭」という建築公開イベントが始まった（2022年のメイン期間は11月11日～13日）。双方の実行委委員を務める私は、こうした動きが名古屋をはじめ、いっそう全国で進展することを期待している。



倉方 俊輔
大阪公立大学教授
建築史家



JIA 建築家大会 2022in 沖縄の参加報告と



フィナーレを飾るレセプションパーティーに出る。後半、沖縄舞踊・エイサーと金メダリスト喜友名諒による空手演武に圧倒されながら、終了間際に壇上で来年の常滑で開催する東海大会のアピールで幕を閉じた。

22日は5つの日帰り見学バスツアーが用意され、20～30人ずつに分かれて各地に出発、最後は空港まで送ってもらい各自帰路に就く。

JIA建築家大会in東海@常滑について

常滑市は、国際芸術祭あいち2022の4会場の一つとして、使っていない焼き物倉庫・作業場を展示場に開放して俄然名が通った。古くは、日本6古窯の一つ常滑焼の産地として国内外へ美術陶器や土管・甕など大型陶磁器を作り送り出していたが、安価な外国製品に押され、現在はINAXのタイル・衛生陶器の生産拠点ではあるものの、一時の隆盛はない。今年の大会テーマは「環ル」(かえル・まわル・よみがえル)です。

常滑の街は、登り窯やレンガ造の煙突が随所に残っており、歩いて散策するにはちょうど良いサイズの街で、温暖な気候風土にも恵まれ、隣の空港島に勤める人の流入もあり人口は微増。今後もJIAが提唱するSDGs「きちんとつくる・だいにつかう・すてずにいかす・ちいきをつなぐ」を基本姿勢に、大会開催が常滑市の自然災害に強く、焼き物に関わる文化芸術の振興と経済のよみがえりに繋がるレジリエンスな街づくりの起爆剤となる事を願っている。

開催まで1年間、支部所属の正会員・準会員・協力会員の皆さん、準備のために多くの方の参加が必要です。皆さんと一緒に準備を楽しみましょう。

小田 義彦 (JIA愛知)
2023年度大会委員長



JIA建築家大会in沖縄 参加報告

セントレア周辺のホテル調査のために前泊して20日7:40発のフライト。空港周辺は大手のビジネスホテルチェーンばかり。早朝発が深夜着のビジネスユースに特化したせいかカウンター周りは機械化されており人員も最小限、バイキング専用のレストランも6時スタートと嬉しい。隣の愛知県国際展示場ができたがキャパは充分。

10月20日(木)の10時に那覇空港に降り立つ。本部事務局は前乗りで9時から受け付け開始している「なは一と」で当日の受け付け登録。受取った名札には、自分が参加する有料プログラムの種類と、所属支部・氏名と個人のQRコードが印刷されており、毎日事務局員が持つスマホで読み取ってもらってCPD登録に代える仕組み。

午前中は常設展示の香山壽夫ドローイング展を見た後、13時から大劇場でコンペ・プロボを戦う金野・畝森という2人の新進気鋭作家の取組みを聞く。15時から近くの八汐荘での支部長OB会に参加、17時からのウェルカムパーティー参加のため那覇埠頭へと急ぐ。

船上、サンセットを眺め心地良い潮風にあたりながらビールで歓談。JIA佐藤会長の突然のサクソフ名演奏に聞き入り、仲間と旧交を温め、来年の東海での開催を紹介・勧誘。2次会は沖縄支部の配慮で会場も準備され、各会場に会員が一人付くという念の入れ様、恐れ入りました。関東甲信越と近畿という支部大票田の二次会にお邪魔して、来年の東海大会への勧誘を念押し。

21日(金)は早朝から、首里城見学の後一旦ホテルに戻り昼食を済ませ支部役員会に出る予定が、会場近くの食堂が混んでいて遅刻。13時から「なは一と」での大会式典、沖縄建築賞表彰式、メインシンポジウムを聞く。大会式典では、當間大会委員長の歓迎挨拶、沖縄県知事・那覇市長のお祝いの挨拶と続き、メインシンポジウムは一般にも公開され、首里城再建に尽力する高良倉吉氏・「なは一と」の設計者香山壽夫氏・永らく沖縄と深くかかわってきた古谷誠章氏の講演と伊良波実行委員長のコーディネートによる「失ったモノ」をテーマにディスカッションが行われた。

19時からは場所をホテルに移して、大会

JIA 建築家大会 2023 東海@常滑に向けて

JIA全国大会2023 常滑

本来なら今年、東海は全国大会のホスト役でした。コロナの影響で昨年も全国大会の開催は見送られ、準備に1年かけてきた沖縄支部と話し合い開催をスライドすることとなった。沖縄にとって本土復帰50年という節目の年。沖縄大会に参加して2年の準備期間、ホスピタリティ精神に溢れたおもてなしの大会。いい意味で東海での全国大会開催の大きなプレッシャーを感じた3日間でした。

東海の全国大会について

夏の暑気払いで発足した実行委員会。現在は大会委員長の小田さんを始め12人でスタートを切り。大きな役割分担もせずワークチャットをつかってフラットに議論している。発足が遅く、皆さんに心配かけましたが、開催地も決まり、ようやく落ち着いて企画に向かう段階です。

開催地「常滑」

常滑は焼物の街です。良質な土と窯に適した地形、伊勢湾航路もあり古くから発展をしてきた。常滑副市長の山田朝夫さんは、「実は産業用の焼物が幹にある。」との

こと。近代には土管などで地域全体が多く窯とサプライ化された大きな工場のような街。当時の様子は写真家、山田脩二の「日本村」写真集(※1)に登場してきま。黒煙で覆われていた常滑の丘の上にふじ色の建物が登場する。堀口捨己の「陶芸研究所」INAXの創業者の伊那長三郎氏が同社の株を寄付し、本館とアトリエを建設、運用資金で現在でも毎年研究生を招いている。近くには、INAXライブミュージアムがあり、中でも日本建築学会賞(業績)を受賞した「テラコッタパーク」は多くの建築家に見てもらいたい。

今の常滑の風景は、短くなった煙突に植物が付着して、使われなくなった窯が点在しており一部観光地としているが当時の風情と劣化した街並みを体現できる。これらは、あいち国際芸術祭の会場としても利用されており、この産業遺構や施設を複合的に利用して、全国大会を開催したい。

テーマ「環ル」はレジリエンス・回復力を意味しています。

沖縄大会では、「失われたことでみえてくるもの」として首里城再建から始まるテーマ

マでした。大会最終日、私は那覇の街をぶらぶらと歩くことに、立ち寄った昼から飲むワインバーで、首里城が消失した時の話を聞くことができた。火災の翌日、バーに出動してきた女の子の目は赤く、カウンターにいた地元の方も同様に大きなショックを受けていた。私の想像を超える出来事だった事をする。

失ったものを戻す。そのプロセスは、アイデンティティを学びなおし、時の環境に影響を受けながら復元する。これらが「回復」といえるのかもしれない。常滑の街を歩いて感じ、考え、「環ル」回復する力を論じたい。また、新しい大会のあり方を皆さんと考えたいと思う。

(※1) 写真集 新版『日本村』1960-2020
山田 脩二著 平凡社

JIA建築家大会2023 常滑
開催日 2023年11月9日—11日



浅井 裕雄 (JIA愛知)
大会実行委員長



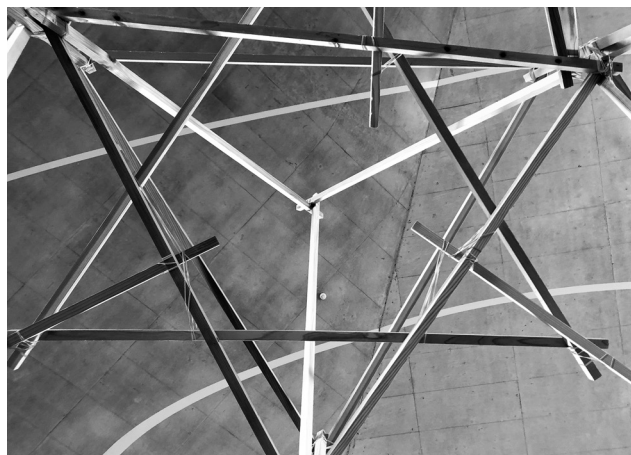
常滑の煙突の今



旧青木製陶所

「WOODコレクション2022inあいち」

2022年10月1・2日の2日間、愛・地球博記念公園（通称 モリコロパーク 愛知県長久手市）で開催



愛知県政150周年連携イベント「WOODコレクション2022inあいち」への建築ワークショップの出席は、県議員の岡明彦氏から県林務課をご紹介いただいたことがきっかけで、同課あいちの木活用推進室からお声を掛けていただいたことから始まりました。このイベントは地域材の利用促進と木材産業の振興のため、子どもから大人まで楽しめる木材の展示・体験をするものです。

JIAが協力できる活動として、昨年秋の愛知県図書館と共催で行った「くつろぎハウスをつくらう!」や名古屋市立猪高小学校での一寸格子の建築教室をお話したところ、推進室の方に興味を持っていただきました。

今年度は初めて愛・地球博記念公園（モリコロパーク）での開催となり、3チームが同時に広いスペースで作品づくりに取り組めるよう、体育館に隣接する地球市民交流センター屋内広場をお借りしました。天井が高く広いドーム空間で、子どもたちは思い思いの“モリコヤ”を製作しました。大勢の来園者にJIAの活動を知ってもらうよい機会となりました。この取り組みが今後の行政との連携のひとつとなることを期待しています。

澤村 喜久夫 (JIA愛知)
伊藤建築設計事務所



さわやかな秋晴れのもと、愛知県下の小学校から建築に興味のある子供たち100名が参加しました。いつもの一寸格子建築WSより短い2時間のプログラムでしたが、建築家が日々行っていることの一端を子供たちにも体験して欲しいと思い、テーマ“モリコロパークにどんなモリコヤ（森小屋）をつくりたい?”の問いかけから、5つのプロセスを心掛けました。

1. テーマと問いかけ (こどもたちの思いやイメージを引き出す)
2. 割りばしによる基本形の練習 (三角形、応用形態、立体)
3. ディスカッションと試作
(考えたことを言葉に 話し合う 誘導は控えめに)
4. みんなで実作 (建築に必要な協力や助け合い)
5. 空間体験 (でき上がった空間を感じる 多様な空間を知る)

毎回各グループから思いがけない立体が組み上るのが嬉しい。あるグループでドームをつくりました。名前を尋ねたら “わくわくドーム!” わく(フレーム)とワクワクした気持ちを掛けたそうです。ネーミングのセンスも光ります。子供たちの創造力の逞しさが印象に残りました。

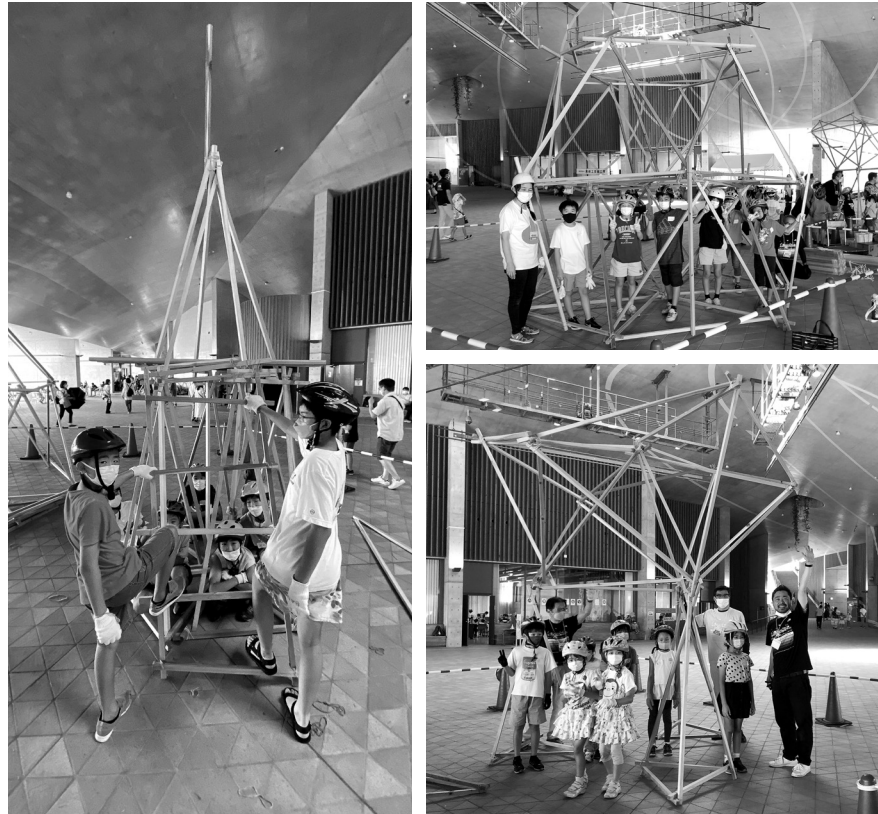
森 哲哉 (JIA愛知 地域会長)
森建築設計室



建築ワークショップ:建築家と一緒に「モリコヤ(森小屋)」をつくろう!

先月号に続いて、JIA愛知事業委員会からの報告です。「一寸格子」によるワークショップは、様々なカタチや要望、ロケーションを踏まえて、進化の時期(とき)をむかえています。イベント(愛知県主催)への出展、事前登録された参加者への対応、午前午後の2部開催、少ない時間でのレクチャーから実作への誘導、初めて同志(小学生)のチームづくり、周囲からの観覧、などなど。今号では誌面をいただき、多くの写真と(前号同様に)多くの参加メンバーのパラレルな視点と感想を掲載していただくことで、現地での臨場感を伝えたいと思いました。さて、11月~12月は、恒例となった猪高小学校での建築教室です。これまでの成果を活かして、また一歩先に進めるか、多くのJIAメンバーの参加を募っています。

黒野 有一郎 (JIA愛知 事業委員長) 建築クロノ



秋晴れの素晴らしい天候に恵まれ、モリコロパーク会場には多くの子供連れファミリーが来場する雰囲気の中、小学3年生から6年生を対象としたワークショップが開催されました。事前に募集した児童たちが初対面でありながらワークショップを通じて共同作業をします。

JIAメンバーは短時間で作品の方向付け、児童達の特性を見極めながら、作業を進める補佐をしなければなりません。そこがこのワークショップの難しいところ。子供たちの発信する言葉や態度を引き上げ、半ば強引に進める部分も出て来ます。

猪高小の場合のように、児童達が考え作り上げるのとは違い、大人が先導する部分がどうしても出てくるためか、出来上がった作品には子供らしさが少々薄いように感じられました。とはいえ、手、体を動かしながら作り上げた作品を見上げる子供たちの表情は、達成感に溢れていました。この体験が、何かしら子供たちの未来に作用することを期待しています。

一寸格子を用いた造形ワークショップは、まちへと繰り出した建築家フェスに始まり、猪高小学校、愛知学泉大学、愛知県立図書館など、数を重ね創成期から成熟期へと伸ばしたものと思っていた。が、過去とは違う意義深い場となった。

今回は、造形ワークショップと同時に私たち建築家のファシリテーション力が試されたのである。チームは小学生低学年、初対面同士。まずはアイスブレイクから。途中、傾聴や思考の大切さも伝える。まちづくりや建築についても対話する。そして、子どもたちのアイデアを引き出しひとつの造形へと導く。一方、子どもたちは、限られた時間の中で構想からスタディ、製作、公衆の面前でのプレゼンテーションまでをも熟す。子どもたちも、私たち建築家も、スリリングな2時間であった。

最後は、恒例の空間体験!子どもたちは達成感で歓喜に沸き、私たち建築家は安堵感に浸った。

金山 美登利 (JIA愛知)
モヴ構造設計株式会社



高木 耕一 (JIA愛知)
東畑建築事務所





20枚のスライド×20秒の プレゼンで自分を表現

20枚×20秒、つまり400秒に詰め込んで自分をプレゼンテーションするこの企画は、昨年とても盛況であり、今年も2回目を開催する運びとなりました。

8月27日(土) JR岐阜駅直結のハートフルスクエアGにて開催され、37名が参加しました。プレゼンターは8名、前は建築士や設計を学ぶ学生にプレゼンテーション頂きましたが、今回は更にバリエーションの幅を広げるべく、施工技術者や職人といった職種の方にもプレゼンテーション頂きました。また、女性のプレゼンターも2名加わりました。

このイベントの醍醐味は、20秒で自動的に次のスライドに切り替わるため、乗り遅れな

いように語り続けるスピード感です。スライドが切り替わり話が途中で途切れてしまったり、話し終わってもまだスライドが切り替わらず一生懸命話を繋いだり、そのライブ感が楽しく、その話し振りからもそれぞれの個性が伝わってきます。

一般的な講演会とは違い発表者と観客の距離感が近いので、プレゼン終了後の質疑応答でも活発な意見のやり取りがあり大変盛り上がりしました。20枚のうち10枚は自身の仕事や研究等につまむこと、10枚は自由としていましたが、今回大半のプレゼンターが20枚とも自身の仕事等の話に偏っていた傾向があり、もっと趣味や興味のあること等、話

に広がりが出るような依頼が出来ること更に面白くなるように感じました。

コロナの影響を配慮し懇親会は開催しませんでしたでしたが、この手法は、クライン・ダイサム・アーキテクツによって考案された「ペチャクチャ・ナイト」が元であり、本来であれば懇親会もセットで開催し、よりペチャクチャすることで、更にクリエイター(ものづくりに関わる人たち)の交流の場として機能していくのではないかと感じました。



山田 浩史 (JIA岐阜)
ヒロプランニング

この度は貴重な機会をいただきありがとうございました。

「ぎふ「20×20」コミュニケーション」は、デザインボックスの山田尚紀さんから「女性の現場監督の声があると良い」というお話を受け、参加することとなりました。

とは言っても現場の辛かったことを話すのではなく、地元のことや自身の思考・行動パターン等、自身について話す割合が多かったような気がします。

一番苦労した点は「スライド間の話の繋ぎ方」です。資料は比較的早く作成できたのですが、20秒の中で今のスライドの内容と次のスライドの導入となると、端的に伝える必要があります。本番では時間オーバーしたスライドもあり

ましたが、無事発表を終えることができました。

発表後の質疑応答に関しては、やはり「どうして施工管理職を選んだのですか」と聞かれました。その時は「納まりを理解するため」と回答をしました。「百聞は一見に如かず」という言葉があるように実物を見ることが私の中で一番重要だと思っています。

現場は3K(きつい・危険・汚い)と言われてはいます。現在はある程度改善されてはいますが、楽・安全・綺麗と断言できるわけではありません。しかし、それを目標にすることが若手社員の仕事だと思っています。例を挙げると床に開口があれば、転落しないような設備を設ける、注意喚起をする。資材が散らかっているのであれば、使いやすいように整理整頓を行

う。このような行動で少しずつ災害が起きる可能性を減らすことができます。

「女性の現場監督をよく見るようになったよ」と職人から聞くことが何度かあります。現在、内藤建設でも工務の女性は4名となっています。現場に出ているため力仕事はもちろんあり、その点では男性との力の差を感じてしまうことは事実です。しかし、お客様は男女問いません。その方々一人一人に対して男女両方の視線を取り入れていくことで、よりよい建物ができていくと思っています。



濱野 華楓
内藤建設

「デジタルのリアル」

- 講演者: 山上 健 氏(山上建築設計)
- 参加者数: 会場9名+オンライン8名 計17名
- 開催日: 2022年 10月 7日

前回の会員研修会 Study Session1に続き「まちを見つめる建築家」を共通テーマとして、今回は山上健氏をお招きして「デジタルのリアル」についてのご講演をいただきました。

まず驚いたのが資料が全てデジタル化されており配布されたA4用紙には4種類の表題と4種類のQRコードが印刷されたもの1枚であり、スマートフォン等で各自が読み取る方式であった。リモートにて参加される方についてはその場でチャット機能を使いURLを送り資料を取得していただいていた。これまで先に参加者へ資料を送っていた手間や印刷していた手間がなくなる事で時間や紙の無駄を減らせ、これからの時代の流れなのかも感じられた。



ご自身が使われているBIMソフトの紹介の後、設計業務以外の仕事に関わっている事としてBIMソフトの使用に関するコンサルタントやアドバイザーとして勉強会などを開催しデジタルの世界を広めていく事にも熱心に取り組まれている

初めにDX(デジタルトランスフォーメーション)についての説明をして頂きました。DXとは企業がビックデータなどのデータとAIやIoTを始めとするデジタル技術を活用して、業務プロセスを改善してだけでなく、製品やサービス、ビジネスモデルそのものを革新するとともに、組織、企業文化、風土をも改革し競争上の優位性を確立すること。

これまでIT化と進められていた事に社外



関係者(顧客や取引先)も含めて企業成長を目指すものであるようだ。

そんな中でも建築設計事務所にとって身近なデジタルがBIMではないかとの事。2023年から公共工事を原則BIM化に向けて国土交通省も段階的に適用を拡大してきている。

ここから、山上氏がBIMを使って実際にかかわってきた仕事をお話いただいた。コンクールやコンペなどを共同で企画し打ち合わせでは一度も会わずに完成させたとの事。BIMを使う事で図面だけでは難しかったヴィジョンが3Dモデルがある事で細かな詳細の打ち合わせも可能であったようでした。遠方の建築士の設計を手伝った時には、BIMについてのコンサルティングも同時に行いデジタルを活用する事で新しいやり方も増えたとの事です。



ご自身の設計については、まず傾斜地の二世帯住宅については3Dモデルを作成する事で複雑な事が考えやすくなり設計の幅は広がったようです。見せて頂いた3Dモデルでは予定建築物の窓から見える近隣建物の状況だけではなく、隣地の建物の窓から見える予定建築物の見え方も確認出来た。次に厨房部分の新築工事を行ったときには厨房機器一つ一つを3Dモデル化する事で必要な給排水、ガス、電気の情報や寸法の情報を個々の厨房機器に持たせることが出来る為、図面については器具表の数値を変更するだけで反映される事が容易である説明をされた。

私が設計の仕事をした頃はドラフターが主流でありまだCADもあまり普及していない時で、その後専用CADや汎用CADが一般的に使用されるようになった頃に独立した為最低限のデジタルのみでこれまで仕事をしてきました。今回のお話を聴講した事で今後少しでも勉強していく必要があると感じる事が出来ました。

相原 宏康 (JIA三重)

Hiro*設計室





湊築島弁天社 正面全景



向拝部の木階・高欄と組物



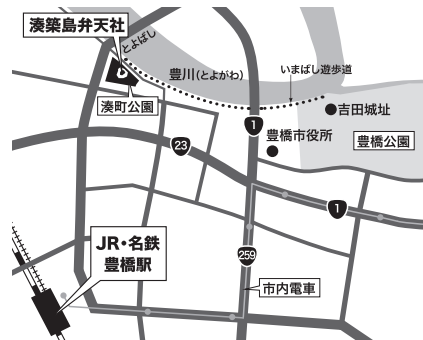
向拝正面・格天井と草木画

豊橋駅の北方1km余の豊川・豊橋南詰近く、また、豊橋公園・吉田城址下の豊川岸辺から「いまばし遊歩道」を西に約500mに位置する湊町公園は、緑と歴史文化の色濃い地域中核公園であり西縁一帯が湊神明社境内となっている。すぐ東隣には池と築島があり、そこに登録有形文化財・湊築島弁天社が佇み建つ。

建物概要は、単層・入母屋造り・本瓦葺の三間堂で、正面に向拝・三方に擬宝珠高欄付の縁が巡り木階3級が付く。外陣は吹放ちで格天井を草木画で飾り、内陣正面には格子戸・背面に内々陣を突出する、と表される。

創建を辿れば戦国時代、琵琶湖の竹生島に鎮座する弁財天の分霊勧請に始まり、天和3(1683)年・神明社内に社殿建立、寛政7(1795)年に現在地に遷座されたと聞く。当初の神仏習合が明治初頭の神仏分離令で式廃止されて、戦後に現社号に改称されたとの歴史が薫る。

間近に古色床しい木の匠と暫し対面すれば、二軒繁垂木や斗拱の繊細と力感、向拝軸組の海老虹梁や木鼻の豪気な装飾性、吉田藩御用絵師による四季折々の草木画の心優しさ、長い年月を経た端々の傷みが一層趣きを増幅して迫る。初対面で深く敬服して止みません。



【概要】

所在地：愛知県豊橋市湊町7-2(湊町公園内)
所有者：宗教法人 神明社
建設年：寛政7(1795)年
構造・規模：木造平屋建、瓦葺、建築面積32㎡
登録番号：23-0304
登録年月日：平成20(2008).07.08
登録基準1：国土の歴史的景観に寄与しているもの
アクセス：JR・名鉄 豊橋駅から北へ徒歩12分

鈴木 利明 (JIA 愛知)
デザイン スズキ



編集後記

●倉方氏の「大阪建築家ものがたり」全6回連載が、実に面白い。10月号掲載・第3回「大阪市中心公会堂」

・すっかりリフレッシュされた写真を拝見し、随分以前に大阪市立東洋陶磁器美術館開催「安宅コレクションの至宝」鑑賞の際、隣接した中央公会堂が随分寂れている印象を持ちました。図録は1998年版、調べてみると1999年からリフレッシュ工事開始との事。12月号掲載・第4回「三井住友銀行大阪本店ビル」・読み終えるや否や、グーグルマップで「中の島」近辺を入念に調べ、ストリートビューで小旅行をしてしまいました。「水都大阪」復活の為に、公民連携して種々なチャレンジがなされ、「イケフェス大阪」のような素晴らしい企画も成熟して来た事、関

係者の皆様に敬意を表します。水に寄り添った中の島界隈の建物群を、いつかクルージングして楽しみたいと思いました。(川合 克己)

●本誌編集責任者に就任してから早くも半年6号目の発刊となりました。こうも早く1ヶ月が経つのかと思うほど編集委員会は直ぐにやってきます。台割りを決め、執筆者にお願いし、ときには原稿を督促し、校正を確認するという一連の作業、事務局の伊ヅミさんにほとんどを頼ってはいらぬものの、編集長としてまったく慣れることなく、追われるばかりの日々でご迷惑をおかけしています。とはいえ、この半年の間に通常2本の年間連載に加え、横関浩さんによる「BIMが切り開く新たな創造性」と、「コンペプロポーザルの可能性」という2つの連載をスタートすることができ好評?を頂いております。今月号は、東海住宅建築賞の結果発表がありました。伊藤恭行さん、脇坂圭一さん

の二人ともが「衝撃」とされた異例の事態、審査の局面での緊張感も伝わってきます。ブックの発刊が楽しみです。(恒川 和久)

ARCHITECT

第411号

発行日 2022.12.1 (毎月1回発行)

定価 380円(税込み)

発行責任者 大瀧正也

編集責任者 恒川和久

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
株式会社イヅミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http : //www.jia-tokai.org/

JIA TOKAI ARCHITECTURAL PRIZE FOR HOUSING PROJECTS 2022

2022 JIA 東海住宅建築賞 2次審査

10月8、9日の両日、2022年度の東海住宅建築賞の現地審査が行われました。まだまだコロナには気を使いながらでしたが無事に現地審査を行うことができました。現地審査の対象となった6作品のクライアントには深く感謝いたします。

最終審査会は、審査員、応募者、事務局メンバーがJIA東海支部に集まり対面での審査会となりました。審査会の様子はオンラインで配信し、多くの方に見ていただくことができたとします。審査員と応募者が対面で議論できたのは3年ぶりですが、やはり直接のやりとりには緊張感がありました。審査会自体の報告は作品集の中でお読みいただけると思いますので、しばらくお待ちください。

審査会後に行われた懇親会では、応募者や事務局メンバーの間で活発な議論が交わされました。当たり前のことですが、対面だからこそこできる交流の価値に改めて気づかされます。応募者には様々なキャリアと幅広い年齢の方がおり、互いの作品批評だけではなく、事務所経営について質問を交わしたり、先輩建築家が若い応募者に対して質疑応答の仕方にダメ出しするなど面白い会話が満載で素晴らしい会になったと思います。

今年の住宅建築賞を振り返ると、最終審査に残った6作品の内3作品が専門の建築家ではなく設計施工一貫の中で設計をする建築家によるものだったのが強く印象に残りました。JIAは専門建築家の職能団体です。そのJIAが選定する賞に設計施工一貫で設計された作品が選定されるというなかなかショッキングな事態が発生したわけです。「日本建築家協会優秀建築選」にも設計施工一貫のゼネコン作



品が選定されますし、その中から「優秀建築賞」を受けるものがあったりします。要は作品のクオリティが高ければ分け隔てなく受賞の対象とするというオープンな選考が行われているわけです。しかし、住宅建築においては専門建築家と工務店、ハウスメーカーとは厳然とした差異があるだと思っていました。

設計施工一貫の3作品を見てみると、「不惑の一棟」は発注者が直接大工（ここでは宮大工）と相談しながら建てるという昔のお屋敷の建て方に近いもので、現代ではなかなか珍しい物件です。大賞となった「土蔵と補う増築」は設計施工物件ではありませんが宮大工が施工に参加しており、どちらの住宅も技術的に非常に興味深い建築でした。建築家が伝統的な技術の継承に何らかの役割が果たせるのか考えさせられる課題です。「川と家」は設計者の自邸ですから、設計施工一貫と言っても特異な事例と言ってよいかと思いません。この二つは、専門建築家の設計によるものではありませんが、ある特殊な条件の元に成立したもので、いわゆるハウスメーカー住宅とは出自が異なります。3つ目の「鳴海の家」は専門建築家に対して問いを投げかける住宅となっています。

これまでアトリエ系建築家を選ぶクライアントとハウスメーカーを選ぶ発注者には大きな違いがあったように思います。建築



家を選ぶ時点で既に他とは違う個性を求めているわけで、設計者は誰でもいいというクライアントはいません。逆にハウスメーカーに注文する発注者にとって設計者は誰でもよく、きちんと要望が満たされることが重要なわけです。少なくとも僕はそのように認識していました。「鳴海の家」の発注者も設計者を指定して依頼したわけではなかったとのことですが、ハウスメーカーに注文したということとも違うようです。建設会社に発注するが出来合いのものではなく個性やクオリティを持つ住宅が欲しいというクライアントがいて、匿名であってもその要望に応える設計者がいるという状況がビジネスとしても作品としても成立していることとなります。

このような受注形態で作られる住宅は今後も増えて行くように思われます。この中からオリジナリティや空間的強度を持った住宅は生まれて来るのでしょうか。やはり、そのような建築は独立したアトリエ系建築家の独壇場なのでしょうか。

今年の結果を受けて来年以降は設計施工一貫の中から生まれる住宅作品の応募が増えて、その中から受賞する作品が出てくるのかもしれませんが、住宅建築において、アトリエ系建築家と設計施工の中で活動する設計者との境界が揺らいでいます。応募していただく方にとっては非礼な言い方になるかもしれませんが、東海住宅建築賞はその境界の揺らぎを観測できる興味深い舞台になって行くのではないかと思います。



伊藤 恭行 (JIA愛知)

JIA東海住宅建築賞
特別委員会委員長

JIA TOKAI ARCHITECTURAL PRIZE FOR HOUSING PROJECTS 2022

衝撃走る、2022 JIA 東海住宅建築賞

2022年度、原田真宏、浅井裕雄、大西麻貴、各氏を審査員にお迎えして「JIA 東海住宅建築賞」の一次審査会（9月10日）、現地審査・最終審査会（10月8日・9日）を終えることができた。住宅賞委員会として、企画、審査に立ち会ってきた立場から、振り返ってみたい。

本建築賞は、審査員によるすべての議論を開示するという「公開性」、あて職を置かず、日本を代表する複数の建築家によって審査を行うという「専門性」、パネルのみでは無く、実際に作品を訪れて評価するという「体験性」、一次審査会・現地審査・最終審査会で議論された内容をブックとしてとりまとめる「記録性」、以上のような特徴を有し、これらは第一回から一貫して変わっていない。そうした一貫性を担保するために、運営は細々とアップデートされ続け、第9回を迎えることが出来た。

本年度の入賞作品6作品のうち、実に半数の3作品がいわゆるアトリエ系ではない建築士による作品となったことはいくつかの点で衝撃的であった。一つは、日本建築「家」協会が実施するアワードにおいて、工務店に所属する建築士の作品が拾い上げられたこと。拾い上げられたと言っても、日本を代表する建築家による審査

員陣によって、一次審査を通して、「作品」としての質が備わっていると認められたということでもある。一つは、工務店の組織内に個別の名称を掲げた設計事務所を設立する動きが少なく無く、そうした設計事務所が一定以上の質を担保した作品をつくり出しているという事実である。

本建築賞は会員に限らず、開かれた募集形式であり、この要項は初回からほぼ変わっていない。しかし、本年度のように工務店に所属する建築士による作品が複数、応募されたのは初めてのことであった。こうした状況に直面したことで、建築「家」の役割とは何なのか、という問いが突き付けられたようにも思う。その問いについて、審査委員長の原田真宏氏は「普遍的な形式を提示すること」と述べていた。単なる表層のスタイルではないのはもちろんのこと、個別の敷地や施主の条件を越えた「普遍性」を有し、さらに未だかつて見られなかった「形式性」を備えている建築を提示することが、建築家の役割であり、そうした建築を「作品」と見なす、ということと理解した。その理解からすると、本年度のもう一つの驚きとして、伝統建築の技を強みとする工務店に設けられた設計事務所に所属する建築士の作品が現地審査対象作品に選定された、とい

うことだ。建築士からは「伝統建築」という見方に対する違和感も提示され、現地審査では熱のこもった意見交換がなされた。見慣れたはずの「伝統建築」の先に「普遍的な形式性」を見いだした審査員陣の評価が多様であることもまた、建築の難しさであり、面白さでもあるが、先の工務店問題も合わせてどういった評価の末に入賞作品が選定されていったのか、年度末に発行されるブックを是非手に取って確かめて頂きたい。

ところで、本学では2年生の「建築計画1」や「近代建築史」において、ブック（記録集）を教科書の一つとして採用し、レポート執筆の際、参照させている。廃刊・休刊となる建築系雑誌が増え続け、今や限られた雑誌だけが発行される状況であるが、紙媒体としてのブックを手取る半ば強制的な機会となっている。建築のビジュアルな側面だけでは無く、個々の入賞作品の背後にある思想に触れ、複数の作品を横断し、それらを俯瞰的に見ること、建築に対する批評的な力を身に付けてほしい、という意図がある。そうした批評力が自らの作品制作に反映され、アワード入賞というかたちで効果が表れ始めている。

最後に、訪問させて頂いた住宅の居住者の皆様、休日にもかかわらずぞろぞろと押しかけ、内部を見せて頂いたこと、感謝申し上げます。ありがとうございました。2023年度は第10回の節目を迎えることとなる本建築賞ですが、まずはブックの完成を目指したいと思います（汗）。

脇坂 圭一（JIA愛知）

静岡理科大学
ヒュッゲデザインラボ





◎大賞：澤 秀俊「土蔵と補う増築」



◎優秀賞：木村 吉成 + 松本 尚子「house/shop F」



○JIA東海住宅建築賞：葛島 隆之「Pergola」



○JIA東海住宅建築賞：望月 成高「不惑の一棟」



◎優秀賞：井畑 菜美「川と家」



○JIA東海住宅建築賞：畠山 博敏「鳴海の家」